

# 極樂満月治療日誌

※体験版※

鬼灯、愛してる・・・」

その言葉に、鬼灯の心は痺れた。しかし、動揺しているのを詭われたくなくて必死で平静を取り繕う。

「なにを言ってるんですか、馬鹿・・・」

「え？なに？」

忌々しそうに言った鬼灯の言葉に、白澤は本当にわからないかのように尋ねてくる。

「さつき、私に・・・」

「僕に挿れてもらいたい？」

その言葉に首から上が熱くなる。

「そ、そんな訳ないでしょう！馬鹿！淫獣！」

がむしやらに腕を振り回し、白澤の首をへし折ろうと頭を掴むと、左へギユギユと曲げる。

「うぐぐぐぐ！！何！だからさつきから何！？」

「何じゃありません！さつきから・・・気色の悪い事ばかり・・・！」

「何言ってるんだよ、僕はさつきから一言もしやべってないよ！」

「嘘おっしゃい！セクハラの連続ですよ！」

鬼灯の腕をなんとか躲し、首をさすりながら白澤が恨みがましそうに鬼灯を見つめる。

「イテテ・・・暴力反対・・・一体なんだよ、さつきから・・・」

心底覚えがなさそうな白澤の態度に鬼灯もようやく異常に気づき、自分の体を省みる。

今は白澤の声は聞こえないが、胸が早鐘のように激しく打ち付けられ、体が熱を持ち、思わずため息を漏らしそうになってしまう。

まさかとは思うが、

(欲情してる・・・?)

なぜだろう、これも毒の効果なのだろうか。今考えられる原因はそれだけだが、何故よりにもよって白澤の声が聞こえるのだろうか。

「・・・もう大丈夫です。白澤さん、続きをお願いします」

自分からテーブルの上へ仰向けに転がり、もう一度同じ状況で事態を確かめてみようとする。

「あ、うん・・・いいけど、抵抗はしないでくれよ」

再び白澤の体が覆いかぶさり、鬼灯の顔に影が落ちる。

「白澤さん、絶対に喋らないでください」

「はいはい」

鬼灯の頭を挟んで、両側に白澤の手のひらがテーブルについている。上から見つめられ、目が合うとい  
たたまれない気分になって思わず逸らしてしまう。

「可愛いね、鬼灯・・・」

「！」

明らかに耳元で囁かれたが、省みても白澤は自分と一定の距離をおいてのしかかったまま、耳近くには  
一切触れていない。

「・・・どうやら、幻聴が聞こえるみたいです、私。それも、かなりハッキリと」

「幻聴？どんな？」

そう問われて、鬼灯は珍しく焦った。愛を囁かれあからさまに卑猥な言葉で動揺させられ、今度は可愛  
いとまで言われてしまった。

そんな事、目の前の人物に言えるわけがない。

「・・・私を罵る声です・・・」

絞り出すような声で低く告げると、白澤は拷問の後遺症だろう、と軽く受け流した。

「じゃあ、がんばって射精してみようか！」

非常に明るく宣言する白澤に、その無神経さをいつもながら痛感する。

「さっさと済ませろ、白豚・・・」

憎まれ口を叩き、顔を逸らせた鬼灯の耳に、生ぬるい感触が走った。

「・・・なっ・・・!」

背中に痺れが走り、何事が起こったのか一瞬わからなくなる。首元には、自分に覆いかぶさる白澤の頭。耳を舐められたのだと自覚した瞬間、再び首から上が熱をもち、心臓が早鐘を打つのを感じた。

「何してるんですか!とつとと精液を絞り出せばいいでしょう!」

「ちよつとでも気分を出してもらおうと思つてさ、その方がお前も気持ちよく、精液もいっぱい出るだろ？」

「私は嫌です！もう、いい加減に……！」

激しく抗議する鬼灯の体が跳ね上がり、声が中断させられる。

白澤が長襦袢ごしに鬼灯自身に手をあて、食い込ませてきたのだ。

たったそれだけで自身は熱く熱を持ち始め、白澤の手に反応を示してゆく。

「んっ……ちよつと……」

大胆に長襦袢の裾を捲くられ、直接自身に手を添えられたとき、鬼灯の体に腰を中心にして甘い痺れが走った。

「鬼灯、気持ちよさそうだね……」

「淫乱だもんね……」

今、確かに二つの声が同時に聞こえた。白澤を試みるが、やはり口を開いた雰囲気は見られない。

(か、完全に幻聴だ！しかも、こんな……)

鬼灯にとっては残酷な甘い囁きである。鬼灯が心を乱している間、白澤は鬼灯自身を片手で握り、ゆるゆると上下に撫で擦ってゆく。

大した刺激でもないのに、ゾクゾクとかなりの快感が鬼灯の背中を走る。

白澤の顔が近づき、いたたまれなくて目を閉じると、再び耳を舌で舐められる感覚がした。

「んっ……く……、こんな事っ……今まで滅多にしないくせにっ……！」

憎まれ口を叩く鬼灯の耳を甘噛みしてやると、鬼灯は喉を鳴らし、自分の手で口を抑えた。

「お前、耳すごく敏感なんだな……」

「……」

何を今更、と切ない思いが胸を突き上げ、心臓が再び早鐘をうち始める。白澤に擦り上げられている自身は完全に反応し、白い長襦袢から厭らしく姿を覗かせている。

「なんか、今日は敏感だね」

頭を鬼灯の白い首に移動させ、細顎の下や鎖骨に舌を這わせる。

「んんっ・・・ん・・・っ！」

手で口を塞いでいなければ、嬌声が出てしまう。下半身には相変わらず絶え間なく刺激を送り込まれ、自分でも自身が濡れ始めるのがわかった。

「鬼灯、気持ちよさそうだね・・・」

その言葉に、鬼灯は首を振って必死に否定の意味を込める。

「もっと気持ちよくなるから、思いつき声だしなよ」

「……っ！何を、馬鹿なっ……！」

いつもは極力声を抑えろと注文をつけてくるのに、調子の狂った今日にかぎって甘言を囁く白澤に一瞬腹立ちがこみ上げる。

「ん？どうしたの？」

鬼灯の反応に、白澤が不思議そうに顔を覗き込む。どうやら、また幻聴だったらしい。現実と虚構の混線に、区別がつけられなくて鬼灯は歯噛みする。一番腹立たしいのは、耳に流れ込んでくる幻聴が鬼灯の胸を高鳴らせ、興奮を高めてしまうことだった。

「ふっ……うう……っ」

白澤が鬼灯自身をゆっくりと擦り続けている。その感覚が今までにないほど甘美で、信じられないぐらいの愉悦を鬼灯の体に走らせる。

自分でもはしたないと思いつながら、先走りの液が流れるのを止められない。白澤の手で高められているのだと思うと、余計に腰に甘い痺れが響いた。

「ほら、鬼灯。素直になつてもっと乱れなよ……」

「ここ、もう濡れてきてる……やらしいなあ……」

幻聴が次々に鬼灯の耳に流れ込み、鬼灯の興奮をそそる。白澤の姿を見たくなくて、鬼灯は目を閉じるが、視界が遮断された分、皮膚の感覚が鋭敏になってしまう。

白澤の舌が首と鎖骨を舐め回し、さらにその下、胸へとゆっくり伝ってゆく。

「んんっ！白澤さんっ……！」

そのまま胸に近づかれたら、自分の早鐘をうつ心臓の男が聞こえてしまう。聞かれるのが我慢ならず、身をよじって抵抗しようとするが、胸の突起を口に含まれて鬼灯の体が硬直した。

「ああっ！あっ！ん……っ！」

ビリビリと甘い電気が走り、思わず声を放ってしまふ。白澤は舌で胸の突起を転がし、味わうようにゆつくりと舌先で翻弄し続ける。片手で握った鬼灯自身にも刺激を与えつつ、最も敏感な性感帯を同時に責められ、鬼灯の口から自覚のない甘い吐息が漏れ始めた。

「んんっ！んあっ！ああっ！」

（なんだこれ・・・私の体、敏感すぎるっ・・・）

今まで数度白澤に抱かれてきたが、これしきの愛撫でここまで醜態をさらしたことはかつてなかった。白澤がいつもはしない触り方をしてくるのも興奮の材料だが、それにも増して、いちいち白澤の指や舌に反応する自分が不思議で、齒がゆかった。

「鬼灯、可愛いね・・・もっと遠慮なく声をあげていいんだよ」

再び、鬼灯を追い詰める幻聴が聞こえる。なぜこんな言葉が聞こえてくるのだろう。今までこんな言葉など目の前の男から囁かれたことなどなかったというのに、全く調子が乱されきって、鬼灯は自分を抑えることができなくなつてゆく。

最後に胸の突起を甘噛みされ、鬼灯の体をつま先まで痺れさせたあと、白澤の上半身は鬼灯の下腹部へ向かい、鬼灯の両大腿を肩に担いでいきなり開脚させた。

「なっ！な、な、ちよっと！下ろしなさい！」

白澤の思いがけない行動に羞恥が先に立ち、慌てて上体を上げ、白澤を怒鳴りつける。しかし鬼灯の目に映ったのは、開脚された自分の足の付け根に顔を埋めようとする白澤の頭だった。

「やめてください！そんな事・・・！」

白澤がこれから自分にしようとする行為に、ますます鬼灯の胸が高鳴ってゆく。心臓の音は激しく、自分の耳にも響いてきそうなほどだった。

白澤の手の愛撫で完全に反応してしまった鬼灯自身を眺めながら、白澤は淡白に告げる。

「治療の一環だっていつてるじゃん・・・それとも、やっぱりお前でも恥ずかしい？」

ニヤリと笑う表情を殴り飛ばしたくなる。恥ずかしいなんて当たり前だ。これまで幾度か抱かれてきたが、これからされる行為は初めての経験で、相手が白澤であるということがさらに鬼灯の羞恥を煽る。

「恥ずかしいとかじゃありません！単純に嫌なだけ・・・はううつ・・・！」

自身に生温かいザラザラした感触が走り、鬼灯の腰を芯まで痺れさせた。

甘い衝撃は何度も繰り返され、その度にビクビクと鬼灯の体が跳ね上がる。

「ふうっ！うう、んっ！んっ！んんんっ！」

鬼灯は口を塞ぎ、必死で喘ぎ声を出すまいと奮闘する。しかし、下半身の愉悦に耐えている鬼灯の体に変化が訪れた。

（！耳が、舐められている・・・？）

ビクリと反応してしまったが、確かにいま、舌の感触で耳を舐められた。白澤の口は今現在自分の両足の間にあり、耳を舌でなぞることなど不可能である。

しかし、異変はそれだけではなかった。

「ぐっ・・・んんっ、んんっ！んんんっ！」

左胸の突起が指で撫で回され、右胸の突起が舌で舐めしゃぶられる感覚が鬼灯を襲ったのである。

（なんだこれ！？おかしい、絶対に、こんなっ・・・！）

耳や胸だけでなく、上半身を無数の舌や手のひらが這い回る感覚が訪れる。ビクビクと体が痙攣し、さ  
れていないはずの愛撫の感覚に翻弄され、白澤に責められている自身への快感が一層高まってゆく。

まるで複数の男に同時に抱かれているような錯覚に、鬼灯の体が不思議と甘く痺れてゆく。

「これだけ責められれば、誰だって悶絶するよ。鬼灯、遠慮しないでもっと乱れて見せて・・・」

こんな時に、また白澤の甘い幻聴が聞こえてくる。耳元で囁かれる声に、鬼灯の体は反応しきり、愛撫  
され続けている自身へ、射精感が一気に駆け上ってゆく。

「んあっ！で、出る、出ますっ・・・！」

自分を啜えている白澤の頭を掴み、必死に引き剥がそうとするが、両足を抱えている白澤の頭はビクともせず、そのまま鬼灯を高める舌遣いを激しくしてゆく。

「あああつ！あつ！はあ・・・っ！ああ、やめ、止めてっ・・・！」

白澤が強く先端を吸い上げた瞬間、鬼灯の腰に一段と甘美な電流が走り、自身に通常の射精とは比べ物にならない快感が走った。

「あああああつ！はあああつ・・・あつ！ああああああ・・・」

一瞬で終わるはずの射精の快感が、白澤が舌で転がしている間ずっと続いている。あまりの快感に鬼灯の瞳から涙が生理的にこぼれ、白澤が最後に激しく吸引すると、大きく体をはねあげてようやく吐精の快感は収まりをみせた。

「はあ、はあ・・・はあ・・・あつ・・・？」

予想以上の深い快感の余韻で鬼灯が肩で息をしていると、白澤が再び自身に舌を這わせ始める。

「も、もう出したじゃないですか！今ので、十分・・・」

キツく先端を吸われ、鬼灯の言葉が つまる。

射精したばかりの自身はそれだけでも非常に敏感なのに、白澤はさらに敏感な先端を執拗に舐め回す。

「ううっ・・・んっ、んん・・・っ」

ビクビクと快感に腰を跳ね上がらせながら、再び自分の口を抑えて嬌声を抑える。

「思いつき声だしなよ・・・」

「これから、もっと鬼灯の乱れる姿をみせてもらうからね・・・」

再び幻聴が耳元で響き、両胸の突起を指で舐られる感覚と、舌が首筋を伝う感触が鬼灯を襲う。

「んんっ！んんっ！はあっ！・・・おかしいっ！おかしいです、私の体っ・・・ああああ！」

※中略※

その言葉にまたもや白い顔を紅く染める鬼灯。連続して何度も絶頂し、最後に怖気が振るうほどの大きな快感が体を駆け巡ってから、意識が途絶えている。

「それにしても、お前凄いな。イケなくする薬なのに、これだけビュービュー・・・」

そこで鬼灯は白澤の口を無理やり塞いだ。羞恥の極みを無神経に指摘され、鬼灯の怒りが、力の入らない手足を動かした。

「んぐぐ、つてことは・・・」

白澤は突然機敏に動き、鬼灯を下にして体にのしかかる。膝をわりこませ、鬼灯の足を開かせると、その中心に触れた。

「はうううっ・・・」

鬼灯の体がビクビクと震えるのをみると、そのまま上下に抜いていく。

「あっやっ・・・っ何すっ・・・んんっ・・・」

性感が高められ、再び絶頂感が迫ってくる。

「どう？もうイク？イク時はイクって言ってね。医者として判断しないといけないんだから」

「はっ・・・ああ、誰がっ・・・」

気丈を取り繕うが、動きを激しくされるとすぐに正体がばれる。

白澤とは何度か体を重ねた経験はあるが、男相手にどうして、と思えるほど手指の動きが巧妙で的確である。

平素の鬼灯ならいざ知らず、全身の快楽神経がむき出し状態になっている鬼灯にはとても耐えられたものではない。

「あつあつあつあぁ・・・」

たちまちなし崩しに高められ、絶頂を迎えてしまう。

ブルブルと顕著に体を震わせた様子を見て、意地悪く笑いながら白澤が

「いった？」

と訊く。鬼灯は短く荒い息をつきながら、首を横にふる。誰が見ても、絶頂を迎えたのは明らかだった。

「うーん、なんでさっきは出ちゃったんだろ・・・後ろでイッたら出るのかな？」

と、今度はローターのスイッチを入れる。

「はうううっ！！ひ、人の体を・・・好き勝手・・・あぁ！」

強弱をつけて操作され、ほどなく絶頂を迎える。鈴口から透明の先走りが射精のように飛び散るが、射精はしない。

「うううう・・・」

恨めしそうに呻く鬼灯を気にする様子もなく、軽々と抱き上げると、ベッドの上に鬼灯を座らせ、自分もその後ろに座る。

「そういえば、この体勢で挿れたことないよね。今度やろっか」

鬼灯の背中に白澤の胸が当たる。いわゆる後背位である。

「バカを言って・・・」

するりと白澤の手が鬼灯の肌の上を這い回り、片方で鬼灯自身を捉え、片方で上半身を責め始めた。

「んんっ・・・」

柔らかな愛撫に、鼻にかかった甘い声が出てしまう。一瞬上半身の手が離れたかと思うと、後ろのローターが動き始めた。

「ああっ！やめて、それ、とっ止めて・・・ください・・・！！」

「あー、なんか僕にも振動が伝わってくるよ・・・」

「はうう、あつ、ああああ・・・んんっう・・・」

鬼灯の腰に、白澤の硬くなった部分が当たる。白澤も欲情していることに、ゾクゾクと追い詰められる快感が追い討ちをかけた。

前の自身を捻るように扱かれ、胸の突起を指先で転がされ、早くも絶頂へ上りつめそうになってしまう。一体どういうつもりなのか、自分をイかせ続ける白澤に納得いかない憤りを感じ、イってやるものかと思地をはってしまふ。しかし、後ろで響き続けるローターがその気持ちをいとも簡単に折ってしまう。

「んんんっ！！んんんっ！！んはああっ！！」

もう耐えられず、嬌声を上げて明らかに絶頂を迎える鬼灯。

実は、今感じている絶頂と今まで射精できた絶頂とは少し違いがあることに気づきつつあった。

射精でイク絶頂は、出すと虚脱感とともに「終わり」を感じることができた。しかし今の絶頂は、イケば確かに絶頂の快楽があり、わずかに虚脱感はあるものの、いつまでたっても「終わり」を感じることができない。疼きっぱなしのスタート地点に戻るだけなのだ。つまり、いつてもいつてもイキたい状態で終わりがないのである。

地獄のような快楽は、絶頂を迎えれば迎えるほど、快感が強く、射精の欲求が強くなっていく。絶頂しているのに、射精できないもどかしさが、さらに本人を追い詰めるのだ。

「あっ！ああああ、あっああ・・・はああっ・・・」

白澤に責められて、また絶頂を迎えてしまう。射精はしていないが、先走りで自分の下半身はズブ濡れだ。

「潮吹いているみたいだね」

耳元で熱っぽく囁かれ、憤りたいのにそれすら快感になってしまい、ビクビクと打ち震えてしまう。

「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

射精感がどんどん募っていき、絶頂しているのに体の疼きが止まらない。感度もどんどん上がり、触られている自身は、むき出しの性感神経を撫でられているほど敏感に感じてしまっていた。

「結構いったね。もしかすると、射精できない分の快感が溜まって、最後にその分が吹き出すのかな？」  
はあはあと荒い息をつく鬼灯をなお刺激しながら、冷静に判断する。  
両手で巧みに自身を擦られて、先ほどイったばかりなのにまたもや絶頂感がこみ上げてくる。声を殺す  
余裕も、悪態を付く余裕も、反応を抑える余裕もない。

「気持ちいい？」

意地悪く訪ねてくる白澤に、唯一首を激しく横に振って抵抗の意を示す。

「ダメだよ、嘘は」

そう言って、鬼灯の自身を片手で上下に激しく扱き、先端を捏ね回すように責め立てる。

「あはあつ・・・つああ、あつ、あううつ・・・！」

その感覚に我慢できず、甘露のような声を漏らす。快感から逃げようとするが、白澤に押さえつけられてそれもかなわない。

「鬼灯凄く感じてる・・・」

「声を抑えるのも忘れちゃってるよ・・・可愛いな」

「犯したいな」

再び幻聴が耳に飛び込み、それを振り払おうと鬼灯は頭を激しく振る。

そんな鬼灯の葛藤など知らず、白澤の手の動きが激しくなり、再び鬼灯は絶頂した。

「ああつ！あ、あああ・・・」

脱力してクタリと体を背後の白澤に預ける。しかし、白澤は鬼灯がいったにもかかわらず自身を同じ調子で責め続ける。

「はあっ、もう、いった・・・イキました・・・ああっ！」

「わかってるけど、射精しないかなうと思っ」

白澤の言葉に心臓がドキリと跳ね上がった。

射精感はいよいよつり、次の絶頂あたりで出そうなのだ。しかし、鬼灯はこの状態で射精するということが、どれだけ自分の負担になるのかを知っている。まるで自分の矜持を踏みにじるように、一切の感情も感覚も許されない悦楽だけの世界。

いっそ暴力的とも言える強すぎる快感に、鬼灯は恐怖すら感じていた。

「はあ・・・っ、あん、射精はっ・・・いやです・・・」

幼児のように懇願するが、白澤は手の動きをやめようとしなない。

「ん？そろそろ出そうなの？ちよつとまって」

そうやって鬼灯から離れると、支えを失ってベットに倒れ込んだ鬼灯を尻目に、金盥を引き寄せた。

「出すならここに狙って出してね」

無神経にもほどがある、と鬼灯は憤りと羞恥で真っ赤になった。これでは、粗相を我慢できない幼児と同じ扱いではないか。

「この・・・無神経、白豚・・・!!」

ベットから起き上がれないでいると、再び背後に張り付かれ、今度は鬼灯の足を大きく広げさせる。その下には、用意された金盥。

暴れようとしたが、体を固定されていて、何より全神経が快感神経に変わっている今、抵抗らしい抵抗は一切できない。

快感はすでに頂点まで高まり、あとは絶頂を迎えるだけの体になってしまっているのだ。

「じゃあ、再開ね」

再び自身を握り込まれ、ゾクゾクと愉悅がつま先まで走る。

「ああっ・・・」

強すぎる快感に、鬼灯の口端から涎が垂れた。

白澤の手の動きが早くなる。

「あっ、ああ、あああ、ふうっ！ううん、んあああ・・・」

「出る？ほら、出しちやいなよ、ほら、ほら」

白澤の腕を強くつかみ、迫り来る射精に備える。一度目に射精したときと同じ、圧倒的な快感が鬼灯を打ちつけようとしていた。

「あっあっあっ、あああ！あっ、あっ、あああああーっ！！！！」

恐れていた、待ちかねていた悦樂が堰を切って一斉に押し寄せる。

※中略※

「オイオイ！ちよつとちよつと！」

語尾に聞き捨てならないセリフを付けられ、白澤は慌てて鬼灯の手を取り、力強く引き寄せた。

「！」

实际体がほとんど回復していない鬼灯は体に力が入らず、白澤の意外な剛力でねじ伏せられ、体勢をかえられて壁に背中を打ち付けられ、無理矢理顔を向かい合わされた。

両手首を掴まれ、壁に押し当てられて、鬼灯は白澤の視線から逃れられない。

「・・・離して下さい」

「やだね。って言うか、触らせないってどういうこと？この先もって何？」

「言葉どおりです。もうあなたとは閨を共にしません」

「・・・・・・・・」

いつもの仏頂面で鬼灯が淡々と告げるのを、白澤は珍しく真剣な面持ちで聞いている。

「・・・・・・・・わかったよ・・・・・・・・お前がそう言うなら・・・・・・・・」

随分あっさり引き下がられ、鬼灯は何故か物足りなさを感じたが、壁に縫い付けられた両手は開放されてはいない。

「あの、ではいい加減に手を離してくれませんか？」

「それはできないよ。まだ治療がすんでないからね」

「だから、治ったと言って・・・・・・・・」

鬼灯が語気を荒げはじめたとき、白澤が鬼灯の両足の間に膝を割入れ、中心を強く押し付けた。重い快感が腰に広がり、反射的に背中を震わせてしまう。

「・・・っ・・・やめてください、こんなこと・・・」

「馬鹿だな、全然治ってないじゃん」

さらに膝を押し当てられ、食い込みが強くなり、どんどん自身に熱が集中してゆく。このままでは、白澤に悟られてしまうほど反応してしまう。

「もう、大丈夫ですっ・・・て、やめ、やめて下さい！」

白澤の顔が迫り、鬼灯に口づけを仕掛けてくる。首を捻ってそれを躲すが、白澤はしつこく何度も接吻を欲してくる。

(感じる、感じてしまう・・・)

白澤の口づけから逃れようと上体を動かすと、下半身も動いて白澤の膝の感覚を強く感じてしまう。しかし、動かなければ口づけをされる。口づけをされたら、たぶん動けなくなってしまう。

二、三度口づけを躲したとき、白澤は唇ではなく耳を舐めあげてきた。

「は・・・やめ・・・」

膝の動きで完全に性感を高ぶらせてしまっている鬼灯は、自覚せず喜悦の混じった声で抗議する。それを皮切りに、白澤の行動がどんどん大胆になって行った。膝が食い込むだけでなく前後に揺れ始め、鬼灯の股ぐらを激しく刺激しはじめながら、耳を舐る舌の動きが生き物のように激しく動く。

「あつ・・・やめて、やめて・・・下さい・・・」

完全に快楽に染め上げられた声で抵抗するが、当然効果はなく、火に油を注いだかのように白澤の動きはさらに強く激しくなっていく。

舐められている耳をかばって逆向きになっても、今度は反対の耳を舐められて結局同じように愛撫されてしまう。首を振って撥ね付けようとすれば、首筋に唇を這わされて、どう足掻いても白澤の愛撫から逃げられない。

白澤の膝が微妙に振動を始め、まるで昼間のバイブのように鬼灯自身を責めあげていく。

鬼灯の腰から下から力が抜け、半ば白澤の膝に跨るような格好になってしまい、食い込みが強く、さらに激しく快楽を貪ってしまう。

「・・・・・・・・つ！」

口から湧き上がってくる愉悅の唾液を何度も飲み込みながら、白澤の舌の動きから逃れようと必死で抵抗を続けるが、気だけが先走っているだけで、その実、体はされるがままの状態になってしまっていた。

「だめ、だめっ・・・・・・・・です・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・」

とうとう隠しようのない熱い吐息を吐き出し、僅かな抵抗を示す鬼灯。そんな可愛らしい抵抗が、相手の欲情をますます煽っているなど、気づきもしていない。

「はぁ、・・・・・・・・あう・・・・・・・・っあつ、は・・・・・・・・」

項から耳を一気に舐め上げられ、鬼灯の体が快感でしびれる。ずっと刺激され続けている下半身はすっかり白澤の膝から離れられなくなり、抵抗することも忘れ、されるがままに弄ばれている。

白澤の熱い吐息が耳にかかる、喉の奥が締め付けられるように切なくなつて、何故か涙が出そうになる。ブルブルと快感に打ち震える鬼灯の頬は夜目にもわかるほど仄紅く上気し、小さな唇から次々と熱い息が吐き出されている。

白澤が左手を自由にした直後、鬼灯の頬をとって正面を向かせ、ようやく口づけをすることができた。

「んっ・・・んふ、んん・・・んっ・・・」

口から鬼灯を食べてしまうような勢いで柔らかな唇を激しく貪り、閉じられた唇を無理やり割って舌を差し入れ、口の中でめちやくちやに暴れまわる。

自由になった左手で白澤の肩を叩くが、力が全く入らず、小動物がじやれるような僅かな抵抗しかできないでいる。

（だ、ダメです、口づけをされたら、もう・・・）

「んん・・・んっ、んっ、んんんっ・・・」

必死で逃げる鬼灯の舌を捕まえ、激しく擦り、強く吸い上げる。白澤の体は一層鬼灯の体に密着し、膝の動きも、鬼灯を絶頂させようとして、より激しいものへと切り替わってゆく。

「んふ、んんっ！んんっ！んっ・・・んううっ！」

喉の奥に引っ込もうとする舌を無理やり絡め、激しく表面を舐めまわしてゆく。鬼灯の口端から唾液が溢れ、白い首筋を伝ってゆく。

鬼灯自身を責めていた白澤の膝がさらに食い込み、細かな振動を与えられ、いよいよ絶頂が近くなつてゆく。自身が反応していることは、白澤も気づいているに違いない。あっけない愛撫でここまで乱される自分の体が情けなくて、悔しかった。

「んんっ、ん、ふっ・・・はあ、も・・・止め・・・」

それでもしつこく白澤は濃厚な口づけを繰り返し、膝の動きも大胆になってゆく。壁に強く押し付けられ、逃げられない鬼灯はされるがまま愛撫を受け続ける。

「鬼灯、気持ちよさそうだね・・・」

唇を離し、敏感な耳に口を寄せて白澤が甘く囁く。そんな優しい声で言われてしまったら、ますます鬼灯の体は熱を孕んでしまう。

「よく・・・つありま・・・せん・・・」

喘ぎを抑えてなんとか返答するが、鬼灯が快感に流されているのは誰の目からみても明白だった。白澤の左手が長襦袢の襟に滑り込み、胸の突起を指一本で上下に擦る。電気のように快感が走り、責められている下半身や吸われている唇にまで一気に快感が駆け巡る。

「んんっ！んっ・・・んふ、うう・・・っ！」

突起を触られるたびに鬼灯の体が小さく跳ね上がり、声をあげまいと必死で口を硬くつぐむ。抵抗して白澤の肩を叩いていた左手はいつの間にか白澤の背中に回され、縋るように白衣を挿んでいた。

体の性感帯を責められ、どんどん絶頂が近づいてゆく。自分では抵抗どころか我慢さえできず、与えられるがまま快楽を享受してしまう。

（だめです、もう、達してしまいそう・・・）

長い睫毛を震わせて一層熱い吐息を吐き始めた鬼灯を見て、白澤はいきなり鬼灯の細顎をとり、正面を向かせてそのまま動かないように固定した。

薄目を開いて見てみると、眼前にはすぐ白澤の顔が迫っている。その表情は影がかかって暗く、よくわからなかったが、まとっている雰囲気はいつもの軽薄なものではなかった。白澤の手を振りほどこうと顔を動かすが、手はビクともせず、動かない。

「お前のイク顔、ちゃんと見たことなかったからな・・・今日は間近で見させてもらおうよ・・・？」

白澤のとんでもない行動に鬼灯は冗談じゃない、とばかりに抵抗を強くした。しかし、快感でトロけ切った体に力は入らず、いつもの無表情な顔を取り繕おうとしてもすぐに白澤の膝の動きで眉間が緩んでしまう。

「はっ・・・そんな、見て、・・・どうするん・・・ですかっ・・・！」

自分をどこまでも侮辱しようとする男に、失望と悔しさがこみ上げてくる。それでも口づけさせれば口内がピリピリと心地よく、舌を強く吸われれば頭が真っ白になった。

「んっ・・・はあ、も、もう・・・！白澤さんっ・・・！」

切羽詰った鬼灯の声に絶頂に近いことを悟り、白澤はますます腕に力を込め、膝の動きを激しくしてゆく。

「んあ、ああっ！あつ、あつ、あああつ・・・！」

「いいよ鬼灯、思いつきりイって・・・」

その直後、鬼灯の頭は快感でトロけて頭が真っ白になり、下半身を痙攣させて絶頂を迎えてしまった。

「ああっ！・・・あ・・・はあ・・・！」

腰から下の力が抜け、白澤の膝に完全に跨る体勢になり、上体を白澤の体に預ける。

数時間ぶりに与えられた絶頂は甘美そのもので、イってはいけないという状況で達してしまったという背徳感がさらに鬼灯の性感を高めていた。

絶頂して肩で息をしている鬼灯を支えながら、白澤は尚も快感の余韻に顔を歪めている鬼灯の顔を見つめている。鬼灯は一瞬だけ目を開けたが、絶頂の瞬間のイキ顔を見られた恥ずかしさですぐに目を閉じた。すると白澤が鬼灯に再び激しく口づけ、口内を蹂躪してゆく。

「んっ・・・ふ・・・んんん・・・っ・・・」

鬼灯の唇は小さい割に触ってみると案外肉厚で、口づけする相手に柔らかく、甘い刺激を与えてくれる。奥の犬歯にさえ気をつければ、何度でも口づけしたくなる唇だった。

「凄く可愛いよ・・・鬼灯・・・」

耳元で囁かれたが、また幻聴だと鬼灯は思い込む。激しく達してしまったため、体中が震えて腰が立たなくなってしまうている鬼灯を横抱きにして、白澤はベッドのある寝室へ向かう。

鬼灯の体を柔らかなベッドへ横たえ、上から覆いかぶさって再び濃厚な接吻を交わす。

（んんっ・・・もう、口づけだけで体がっ・・・！熱くて、しびれて・・・）

鬼灯の心情などわからぬ白澤は、口づけながら鬼灯の長襦袢をスルスルと脱がせてゆき、白い裸体を頭  
にさせた。火照った体に冷たいシャツが気持ちよくて、鬼灯はつい枕に顔をうずめてしまう。

また白澤の声で「可愛い」と幻聴が聞こえたが、無視しているとすぐそばでも衣擦れの音がしていた。  
顔を上げて見ると、白澤が服を脱ぎ散らかしているところだった。

いつも交わるときは、鬼灯が裸になっても白澤は決して服を脱がなかった。それなのに、今日に限って  
どうして……

鬼灯が疑問に思っただけで白澤の上半身を見つめていると、いつもと様子が違う事に気がついた。まるで蛍の  
光のように、白澤の体が薄ぼんやりと光をおびているのである。

「白澤さん……、どうしたんですか……」

「いつもお前とするときは店が営業中で、しかも昼間だからね。いつでも接客できるように、服だけは  
脱げなかったんだよ。でも、今は夜だし、店も閉店してるから、これで思いつきお前を抱くことがで  
きる」

抱く、という単語に鬼灯の胸がまたもや高鳴った。性のはけ口のような扱いを受けてきた鬼灯にとって、  
今日の白澤はつくづくおかしいと思う。

いつもは伏せさせる自分の絶頂した顔を、今日は見たいと言い、目の前で裸になったり、抱くと言ったり・・・

「服じゃなくて、体です。なんだか、微妙に発光してませんか？」

「ああ、これね。ちょっと神気を開放してるからだよ」

「どうしてですか？」

首を傾けて不思議そうに問うてくる鬼灯に覆いかぶさり、白澤は言った。

「お前の体の毒を、もっと早く消す方法を見つけたんだよ・・・」

「え？そんな方法があったんですか？なんでもっと早く・・・！」

「いや、確実に消えるって保証はないけど、試してみる価値はあるんじゃないかな〜と思って」

いつもの白澤らしい飄々とした態度に戻り、鬼灯は心の底で少し安堵しながら、胡散くさそうに白澤を見返す。

「で、方法は？」

「僕がお前の体内に神気を注入して、毒素を追い出すんだよ。もしかすると、ちよっと辛いかもしれないけど、いい？」

「はい、少しでも早く症状が収まるのなら・・・」

言いながら、鬼灯は内心焦りまくっていた。

白澤は裸になって自分の上に覆いかぶさり、先程抱くと言い、さらに神気を注入するとか言っている。この状況からして、考えられる方法は一つだった。

「あの・・・」

「何？」

「その・・・交わる以外に、神気を私の中に取り入れる方法とかないんですか？口から流し込むとか、毛穴から入れるとか・・・」

「心配しなくても、全部するよ。だから、お前は黙って抵抗せずにいればいいんだよ」

ぐい、と白澤の顔が近づき、互の体が密着する。

白澤の皮膚の温度を愛おしく感じながら、いつもとは違う皮膚の感触に鬼灯は気づいた。

白澤と触れ合っている部分から温かい熱が溶け出し、細胞の一つ一つにまで染み渡るように広がってゆくのである。

純粹に気持ちが良いくて、鬼灯は吐息をあげそうになるが、白澤の手前それは耐える。

「どう？僕の肌の感覚？」

「・・・悪くないです・・・」

「うーん、もうちょっと具体的に言って欲しいんだけどなあ。じゃあ、」

白澤は鬼灯の手首にかかったままの鬼神力を封じる数珠に手をかけた。

「ねえ鬼灯。どうして僕とお前ってセックスの相性が良いんだと思う？」

「・・・そんなの、考えたことありません・・・」

白澤の質問に、鬼灯の胸に再び切なさがせり上がってくる。鬼灯にとっては性交などどうでも良い行為であり、一番の理由は・・・

「お前は常闇の鬼神、僕は清廉な神獣。陰と陽、光と影の存在が交わって、お互いに反発し合うから、それが刺激になって気持ちいいんだ・・・と、僕は思う」

白澤に言われると、思い当たる節はいくつかあった。

他の獄卒や鬼たちと違って、白澤を口淫するとき舌が少しピリピリしたし、体内に入られると、むず痒いような、えも言われぬ感覚が広がってゆく。他の誰と交わっても、そんな感覚は白澤とだけだった。

ずっとつけっぱなしだった、手首の鬼神力を封じていた数珠が白澤の手で取り払われる。

「これで、お前は鬼神の力が全開。僕は半分ぐらいに抑えて、これから治療にあたるから、不必要に暴れたり抵抗したり、絶対するなよ？痛くてもなるべく我慢しろ。どうしても我慢できないときは、『白澤さん、許してください』……と……」

「どうでもいいからさっさとやれ」

鬼神の力で白澤の頭を叩き、ペラペラとしやべる口を黙らせる。ベッドから吹っ飛んだ白澤を見ながら、改めて鬼神の力が体に漲るのを感じ、やはりこれでなくては、と鬼灯は満足していた。

「いてて……力が戻ったとたん、これかよ……。半分と言わず、神気全開で治療するぞコラ……」

白澤が恨みがましく鬼灯を睨むが、当の本人は我関せずの表情である。

「じゃあ、とつとと神気注いで毒素を排出させてください。ちなみに、方法が間違っていたときは覚悟してくださいね」

「こんな怖い患者いる？」

そう言い放って、鬼灯はいつも抱かれるうつ伏せの体勢に移ろうとしていた。

「あー、ちよつと待って。今日は正常位！」

「はあ？何の意味があるんです？」

「患者の様子を見ながら施術しないといけないじゃん？だから、向かい合って今日はするんだよ」

自分の醜態を見て笑おうという魂胆が見え見えな発言に、鬼灯は内心怒りが湧き上がったが、それならば絶対に感じてやるものかと覚悟を決め、再びベッドの上へ仰向けに寝そべった。

白澤が再び鬼灯の上に覆いかぶさり、手のひらで鬼灯の上半身を一撫でする。

その瞬間、電気のような熱が広がり、すぐに皮膚へ浸透すると細胞が溶けていきそうな感覚が襲った。

「あつ・・・！ちよつと、待ってください・・・！」

突然与えられた予想外の感覚に、鬼灯は白澤の腕を掴んで動きを止める。

「何？どうしたの？」

「いえ、あの・・・」

触られた場所は、今もジンジンと愉悅に近い感覚が渦巻いている。手のひらで一撫でされただけでこれでは、体中を弄り回されたとき、どんな事になるのか想像すらできない。白澤の顔が急に迫り、息がかかるほどの近くで問うてくる。

続きは製品版でお楽しみください。